

塩谷郡市医師会だより

Contents

平成22年度第2回役員会報告
 学術講演会報告
 シリーズ「塩谷医療史」番外編

社団法人 塩谷郡市医師会
 広報委員会

〒329-1312
 さくら市桜野1319番地3
 さくら市氏家保健センター内
 TEL 028(682)3518
 FAX 028(682)5760

平成22年度第2回役員会報告



平成22年7月26日(月)午後7時よりさくら市氏家保健センター集団指導室にて開催された。

出席者：山田会長・尾形副会長・岡副会長・池田・後藤・軽部・佐藤勇・佐野・本間・谷口・越井・大和田・手塚・小島・江口・(委員会)森島・仲嶋・糸川事務長

議題 市民公開講座について

10月3日(日)さくら市氏家公民館で行われる市民公開講座の準備の進捗状況について担当の森島社会活動委員長から報告があった。

今回の講演のテーマは「在宅医療の実際 - 自宅で看取るとのこと - 」で、講師は在宅ホスピスに積極的に取り組んでいる渡辺邦彦氏。主講演前にAFAA認定インストラクターの加藤朋子氏による「お手軽健康体操」が行われる。講演の広報はポスター、健康かわら版、養生のススメ等で行われる。

議題 医療情報一覧表作成について

山田会長から塩谷地区の各医療機関の医療の現状をお互いによく知り、さらに住民の方々にも知ってもらうために医療情報の表の作成について話があった。栃木県医師会作成の医療機関情報サービスをもとに今後各医療機関にアンケートをとる予定。情報の配布等については今後検討することになった。

議題

HPV・Hib・肺炎球菌等ワクチンについて

さくら市では8月1日から小学6年生と中学生の女子を対象に子宮頸がんワクチンの公費助成による予防接種が行われるが、Hibワクチン、肺炎球菌ワクチンなどについて2市2町の公費助成の予定などについて報告があり、今後塩谷郡市医師会、各市町の医師団が行政に公費助成の働きかけをしていくことで意見が一致した。

議題

(1) 日赤・新病院救急医療協力アンケート

大田原赤十字病院が2年後に新築移転するが、一時救急を担う時間外一般診療所が同病院内に設置され、那須郡市医師会の会員が診療を行うことになった。塩谷郡市でも矢板市など北部地区では時間外で県北地域の時間外診療を受診する患者が多いことから、本医師会でもこれに協力できないかという考えから会員に対し協力できるか否か等を問うアンケートを行った。

塩谷郡市医師会ホームページ/メール	広報委員会編集部	医師会事務局
URL http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/ メール shioya@tochigi-med.or.jp	岡 一雄 r2d2@msh.biglobe.ne.jp 尾形新一郎 ogata@o-ga-ta.or.jp	糸川 shioya@triton.ocn.ne.jp 坂和 sakawa@e-shioya.jp

その結果、A会員数55名中43名の回答が寄せられ、協力できる3名、協力できない40名であった。

協力できない主な理由は さくら市、高根沢町地区の会員は地区の住民が大田原地区の救急を受診しない、協力するなら宇都宮休日夜間診療所、距離的に遠い等の回答が多く、また塩谷地区で1次救急を行うべきである、黒須病院で時間外を行うなら参加してもよいなどの意見があった。今回の役員会では意見の集約が困難であることから総務会で再度検討して役員会に諮ることになった。

(2) 新公益法人制度改革について

桑川事務長から報告があり、平成20年度会計基準作成のための会計ソフト導入が決められた。

(3) 県地域医療再生計画講座助成について

県が医師などの医療従事者と地域住民の相互理解促進のために医療機関や住民グループが開く講座の経費に対し助成することが決まったため、本医師会も助成の対象となる講座開催のための申請をする方向で準備することになった。

学術講演会報告

▶ 「糖尿病の新しい治療戦略

シタグリプチンの効果的な使い方

日時：平成22年5月25日（火）

講師：グリーンクリニック院長 黒田久元先生

最近、糖尿病の新薬がどんどん登場し以前に比べると治療の幅がひろがっている。今回は話題の新薬であるシタグリプチン（DPP



-4阻害剤)の講演会であったため、普段より多くの会員が参加した盛況な講演会であった。今までの糖尿病の

治療は経口薬ではSU剤が中心であった。SU剤は強力に血糖値を下げる一方で、使い過ぎにより膵臓が疲弊してしまうことが指摘されていた。今回話題となった新薬のシタグリプチンは活性型インクレチンを増加させ、血糖値が高い時だけ作用し、低血糖を起こしにくく、一部の糖尿病薬で指摘されている体重増加を起こしにくいという特徴がある。シタグリプチンはまだ発売されて半年余りであるが、黒田先生は治験に関わられていたため、豊富な使用経験をもとに、この薬が低血糖を起こさず、安全にしかも強力にHbA1cを低下させることを示してくれた。またSU剤よりもピグアナイト製剤のほうが膵臓にはやさしく血糖値を下げるためお勧めであるとの話もあり、今後の我々開業医の糖尿病治療の実際的な指針を示してくれた。

▶ 「咳・喘鳴を来たす疾患の鑑別診断とその治療戦略 - 最近の呼吸器分野治療トピックスを中心に - 」

日時：平成22年6月15日（火）

講師：大田原赤十字病院副院長 阿久津郁夫先生

咳や喘鳴などは一般診療では良く遭遇する症状である。特にそれらが長引くと治療に難儀することが多い。今回の講演会で阿久津先生はわれわれ開業医が困っている事態に呼吸器の専門家の立場からわかりやすく解説し、その解決方法を示してくれる、いわゆるかゆい所に手が届いたような講演であった。咳喘息、アトピー咳嗽での気管支拡張薬、ステロイド吸入薬などの使用方法と鑑別方法、喫煙が主な原因となるCOPD、新型インフルエンザ対策、最近の肺がんの化学療法にいたるまで幅広い話題であった。気管支喘息の治療で最近よく用いられることになったステロイド吸入薬と気管支拡張吸入薬の

合剤についてもまとめてくれた。また、最後に医療連携に触れ、2年後に新築移転される大田原赤十字病院の紹介があった。



▶▶ 「排尿障害の診断と治療」

日時：平成22年7月20日（火）

講師：上都賀総合病院泌尿器科 金水英俊先生

現在、塩谷地区には泌尿器科の開業医は無く、基幹病院の黒須病院と塩谷病院にも常勤の泌尿器科の勤務医もいない。しかし、日常診療で小児科、内科、婦人科など、泌尿器関連の疾患を診療する機会は決して少なくない。今回の講演会は泌尿器の中でも排尿障害に的を絞って上都賀地区の地域医療に貢献している泌尿器専門家の金水先生に講演をしていただいた。

まず、泌尿器の解剖から始まり、排尿障害は蓄尿症状と排出症状に分けて考える必要があることを示してくれた。前立腺肥大症や40歳以上の12%超の罹患率である過活動膀胱の診断と治療についてのわかりやすい話があった。また、専門医に紹介する目安についても触れた。講演後、会場からは身近な膀胱炎の治療法や在宅でのバルーンの管理法などについて質問が寄せられた。



第125回栃木県医師会臨時代議員会開催

平成22年6月26日（土）

太田新会長に代わって初めての臨時代議員会がとちぎ健康の森講堂において開催された。臨時代議員会は従来慣例的に9月に行われていたが、新年度が始まって3カ月以内に行わなくてはいけないという規定に則って今回は春に行われたものである。

太田会長のあいさつ、執行部から会務報告、平成21年度会計決算、平成21年度塩原温泉病院決算、平成22年度医師会会員会費減免などの議案が出され、可決された。また、塩谷都市医師会の大和田代議員が個別指導の問題点についての質問をした。詳細は栃医新聞の代議員会の記事を参照ください。

安藤たかお候補、参議院選当選ならず

7月11日投票が行われた第22回参議院選挙で日本医師連盟が推薦した安藤たかお候補（民主党）は次々点で落選した。また、支援とした西島英利候補（自民）、清水鴻一郎候補（みんな）も落選した。一方、日本歯科医師連盟、日本看護連盟、日本薬剤師連盟の組織内候補、支援候補はいずれも当選した。

安藤候補の全国での得票は71346票、栃木県での得票は3138票、塩谷地区は矢板市311票、塩谷町223票、さくら市105票、高根沢町64票の計703票で栃木県全体の約22%であった。

2年後に予定されている診療報酬、介護報酬同時改定は、医系議員が当選できなかったことにより、さらに厳しい状況が予想される。

シリーズ 塩谷医療史

番外編

医者の仕事とは

閑話休題ということで、今回は少し医療史からそれた話題を取り上げさせてもらう。

宮澤賢治といえば、「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」の言葉がすぐに浮かんでくる。賢治の作品は小学校から高校の教科書まで幅広く取り上げられており、世代を超えて日本人から最も愛されている国民的な作家といえるのではないだろうか。

その賢治が多感な青春を過ごした盛岡高等農林学校時代に学友たちと文芸同人誌「アザリア」を発刊していたことは案外知られていない。その同人誌の中心となったのが宮澤賢治、小菅健吉、保阪嘉内、河本義行の4人で、この4人はその後深い絆で結ばれ、やがてお互いにかけてあげない友となる。

そのひとりである小菅健吉はさくら市（旧氏家町）氏家新田出身であるが、盛岡高等農林学校卒業後にアメリカに留学、帰国後は日本の農業教育に大きな足跡を残した。健吉は賢治や保阪嘉内、河本義行の三人が早世した後に、彼らの遺業を伝える生き証人となったが、自らについては生涯詳しく語らなかったため、賢治との関係はおろか何をおこなった人なのかも地元ではほとんど知られていない。そのため、有志が小菅健吉の研究、顕彰を目的とした会を発足することになり、その記念講演会が去る6月27日さくら市ミュージアムで行われた。

この講演会に招かれた講師の保阪庸夫氏は前出の保阪嘉内の次男で、宮澤賢治研究の第一人者でもあり、保阪家に残されていた賢治からの手紙73通を題材とした「宮澤賢治友への手紙」（筑摩書房）の著者としても知られる。現在83歳の庸夫氏は故郷の山梨県

韮崎市で医業に従事する現役の外科医で、日本百名山で有名な深田久弥が最後に登頂を目指して果たせず終焉の地となった茅ヶ岳（かやがたけ）に、深田氏急病の知らせを受けて酸素ボンベを持って駆け付け、最期をみとった医師でもある。

最期をみとったといえば、肺結核で亡くなった宮澤賢治の最期を診たのが栃木県那須出身で花巻共立病院院長であった佐藤隆房である。佐藤隆房は賢治の死後、佐藤郷志館（現桜知人館）という展示館を造って賢治の作品や資料を展示した。その佐藤隆房だが、実はさくら市の檜山猛郎先生の奥方の叔父にあたるという。

展示館といえば、我が塩谷郡市医師会が生んだ不世出の郷土史家、さくら市の故長嶋元重先生も自宅敷地内に塩ノ谷郷土史館という私的な博物館を造っていた。長嶋先生は歴史研究と文化振興に一生を捧げ、昭和44年発行の栃木県医師会史は長嶋先生がいなければ完成しなかった。今回の講演の会場となったさくら市ミュージアムも先生の尽力により設立された。

こうしてみると、意外な所に人の縁があり驚かされると同時に、医療史に限らず歴史を知ることの面白さを痛感する。そして、医者の仕事というのは単に病気を診るだけにとどまらず、人の生き方やその残したのものまでを含めて広く診ることなのかもしれないと考えさせられる。（担当：岡 一雄）



長嶋元重先生が設立に関わったさくら市ミュージアム